GIBS&

聖学院大学 広報誌

TAKE FREE

一人を愛し、
一人を育む。

№
01

創刊号

聖学院大学の「今」と「これから」が見えてくる
コミュニケーションマガジン

Love God and Serve His People
聖学院大学
一人を愛し、一人を育む。

笑い、学び、悩みながら成長中。
聖学院生のありのままの姿

聖学院生は4年間という限られた時間の中で、何を学び、どんな日々を過ごしているのでしょう。
「自分の興味があることには、なんでもチャレンジしたい。」
そう語るのは、現在大学２年生の浅見 怜奈さん。
彼女と彼女を入学前から知る清水先生との対話を通して、聖学院生のありのままの姿を見つめてみました。

与えられるのを待つだけじゃなく、自分から。
聖学院は私が成長していける場所。

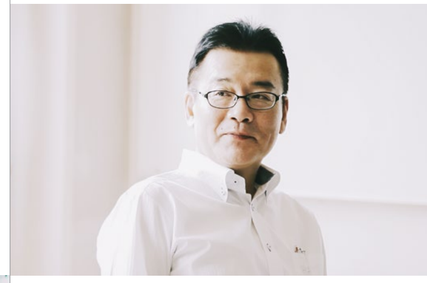
大学生活の満足度は、
二年目で35%から55%にUP。
理想の大学生に近づくために必要なこと。

清水　僕と浅見さんの最初の出会いは、入学試験の面接の時だったよね。
面接を担当した受験生は結構覚えているんだけど、浅見さんは特に印象に残っていて。とにかく、第一印象は「明るいんだけど、シャイ。シャイなんだけど、すごく我が強い（笑）」。面接ではあらかじめ用意をしてきた“言葉”を話す受験生がほとんどだけど、僕はその子自身の言葉を引き出したいと思って、いろんな変化球を投げるんだよ。浅見さんの場合は、その時にしゃべった内容よりも、話す時の表情や語り口そのものに強い意志を感じたんだよね。なんとかして“自分の言葉”で話そうっていうね。
浅見　はい、実は清水先生のおっしゃる通り、何を話すか用意していかなかったんです（笑）。自分の言葉で話したいなと思って。
清水　そうだよね。その印象が残っていたから、1年生の時にライフデザイン（※）の授業で見かけてすぐに面接したあの子だってわかったんだよ。毎回授業の最後に感想や気づきを書いてもらっているんだけど、そこでも印象に残る言葉があって、感想も毎回しっかり書いてくれていた。なんて言うか、文字が紙の上で3D化しているっていうか（笑）。言葉が浮かび上がって、グイグイ主張してくる感覚があったね。
浅見　（笑）。自分でも我は強い方かなと思います。
清水　浅見さんの中に何かを表現したいという想いが強くあるんだろうね。ちなみに、1年生の春学期の最後に大学生活に対する満足度を書いてもらった時は、確か35%だったよね？友達関係とかは充実している印象だったから意外だったんだけど、どうして？
浅見　自分ではまだ「理想の大学生活」が送れていないという感覚があって…。例えば、朝ちゃんと起きて、ご飯を作って大学に行く。勉強して、友達と関わって、課題をやって、バイトに行って、帰宅してきちんと身支度して寝る。そういう普通の生活が理想です。当たり前のことを当たり前にしっかりやりながら、いろんなことを吸収していきたいんです。
清水　それはどうして、“理想”なの？
浅見　…実は私、中高の時は周囲の人と仲良くできなかったんです。だから、大学生になったら自分で何かを見つけて自分から友達に関わっていこうって思っていました。でも、まだまだ自分から動けない時もあって…だから、35%にしたんです。
清水　なるほどね。あれから少し時間が経っているけど、いまは何％？
浅見　55%くらいですかね。
清水　ちょっと上がったね（笑）。でも、理想が高いというか、自分に厳しいね。
浅見　だって100%って言ったら、満足してそれで終わっちゃうじゃないですか（笑）。

もっと勉強したい！
でも、大学に入ってから私はどうなりたい？
自分に問いかけ続けた、高3の秋。

清水　浅見さんはどうして聖学院に入ろうと思ったの？そもそも大学に行きたかった？
浅見　大学に行きたいと思ったのは高校2年の時です。きっかけは、歴史の授業でした。政治が荒れていた時代に市民が城壁に「やってらんねぇよ！」という意味の言葉を書いた

※ライフデザイン…日本文化学科の必修基幹科目『ライフデザイン・良く生きる』。
大きく分けてキャンパスデザイン（大学生活）とキャリアデザイン（卒業後の進路）の2つからなる講座。



という写真が教科書に載っていたんです。それを見た時に、面白い!!ってビビッときて。歴史というとその時代に目立った活躍をした人を中心に話が進んでいくじゃないですか。でも、そうじゃなくて、今の私たちと同じようなことを考えて普通に生きていた人がいたんだって気づいて。とても興味が湧いたんです。これがきっかけになって、もっと学びたい！大学に行きたい！と思うようになりましたね。
もともと、聖学院のことは知らなかったんですが、高校で進路指導室の先生からこんな大学もあるよとおすすめされました。調べてみたら「日本文化学科」という学科を見つけて。文学や文化、歴史も学べるし、キリスト教の大学で他の宗教を勉強できるのも面白そう！と思いましたね。
清水　そうだったんだね。じゃあ、大学を知ってからオープンキャンパスには来たの？
浅見　オープンキャンパスには来なかったです。でも大学の普段の姿を見たかったので、高校3年の秋に2回ほど個別で大学見学をしに来ました。最初に来た時に、職員の方に案内してもらって大学の施設を見て回り、授業のカリキュラムも見せてもらったりして。1回目の見学でだいぶ意思は固まったんですが、2回目はここで自分がどんな学生生活を送れるのかを具体的にイメージしたくて見学に来ました。その間に他の大学も見たりして「大学に入ってから、自分はどうなりたいんだろう？」って何度も考えました。

このままじゃチャンス逃しちゃうかも…！
ひねくれ者だった私が、
友達との出会いで少しずつ変化した。

清水　浅見さんは面接での印象が強かっただけに、その後どんな風に大学生活を送っているんだろうって気にかけていたんだけど、入学後に何か変化はあったのかな？
浅見　社交的になったかな。昔はこんなに人と話せなかったです。もともと、いろんなことに対して斜に構えてひねくれた考え方をするタイプだったのですが（笑）、大学に入ってこのままじゃチャンスを逃しちゃうなって気づきました。
清水　そう思うようになったきっかけは？
浅見　一番は友達の影響ですね。それまでは人との間に距離をおいてしまっていたんですが、仲の良い2人の友達に出会って考え方がガラッと変わりました。その子たちの人との付き合い方や考え方、やるべきことはしっかりやる姿勢に触れて、私もこんな人になりたい！と憧れるようになりました。それからは、いつでもその2人をジーッと観察して（笑）。友達付き合いの中でどんな話し方や振る舞いをしているのかを参考にして、少しずつ吸収して、自分でも実践するようになりました。
清水　浅見さんは「気づく力」があるよね。だからなのか時々目が真剣になっていて圧倒されちゃう時がある（笑）。いろんなことに取り組んでいる姿を見ていて思うんだけど、何がそんなに浅見さんを駆り立てているのかな？
浅見　そもそも大学って、与えられるだけの場所じゃないと思っているんです。だからいつも、ああした方がいいかな、こうした方がいいかなって考えて行動するようにしています。2年生になってからはオープンキャンパスのスタッフや、大学の地域連携イベントなどのボランティア活動を通して自分の世界が広がったと感じています。ちょっとずつでも…能動的な自分になれるといいなと思って。
それに、聖学院での活動には「自由」をすごく感じます。これがやりたい！と思ったことに対して発言しやすく周囲の人が受け入れて助けてくれる環境がある。これは私の行動の後押しになっています。大学の先生って入学前のイメージでは「雲の上の存在」でした。でも今はとっても身近。清水先生も含めて周りの先生や職員の人が「学生一人ひとりを見て、ちゃんと話をしてくれる。考えてくれている」と感じられます。それは決して私だけじゃなく、友達もみんなそう感じていると思います。

これから先も、まだまだ
やりたいことがたくさんある。
人生で一番自分と向き合っている2年目の今。

清水　今の浅見さんにとって「大学生活」って、どういう意味を持つことなのかな？
浅見　そうですね…一言で言うと、“自分で自分を見つめ直す大切な時期”かなと思います。自分の足りていない部分や課題に気づいて、それを克服する方法を試行錯誤しながら見つける。よく「大学生は暇」って言われますけど、いろんなことに取り組んでいると案外時間は足りないなって思いますね。
清水　まだ2年生だけど、これから先の大学生活をどうしていきたいか考えている？その先の将来の目標とかも。
浅見　将来は、まだハッキリとはしていないのですが…報道関係の仕事に就きたいなと今は思っています。外から見ているだけでは分からないことってたくさんありますよね。自分が「それって本当にそうなの？」と疑問に感じることに突っ込んでいけるような仕事がしたいです。そして、それを人に伝えたい。
清水　そのために、今心がけていることってあるのかな？
浅見　まだまだ力量は足りていないけど、やりたいことには積極的に参加するようにしようと頑張ってます。例えば、オープンキャンパスのスタッフもそうです。私、自分はいわゆる一般的なタイプの学生だと思っていて。もちろん大学の素敵なところをきちんと紹介することも大切だけど、大学のありのままの姿を伝えることもとても大事だと思うんです。入学してからの学生生活をできるだけ具体的にイメージできるようにしてあげたいなって。だから、私はオープンキャンパススタッフに参加する時「この大学の一般的な学生の代表です」って思って、自然体でいようと心がけています。
今、聖学院に入りたいって思っている人にも、まだどうしようか悩んでいる人にも、大学はそんなに堅苦しくないって、もっと気軽に考えてもらいたいです。
清水　それも将来やりたい「自分で見たもの感じたことを伝える」っていう仕事につながるよね。じゃあ、今後身につけていきたいことって何だろう？
浅見　まずは残りの大学生活の中で、自分の目でいろんなものを見る練習として「見方」を養いたいです。ゼミや学校のボランティア活動を通して洞察力を磨きたいですね。
どうやって磨くかやどう伝えるかは、今はまだ模索中です。自分の目で見て、いろんな経験を通して、この先の大学生活で何ができるか考えて行動していきたいです。

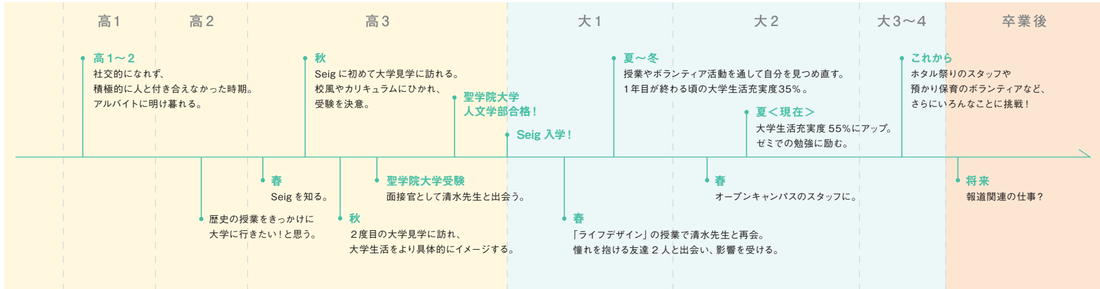
PROFILE (L-R):

清水 均 教授
聖学院大学人文学部日本文化学科教授。人文学部長、学長特別補佐。文学、アニメ、漫画、映画、お笑いなど現代日本文化を主とした研究活動を行う。大学の講義では自分の人生をどのように描き、どうしていくのかを問うライフデザインの授業で教鞭をとる。親しみやすい人柄で学生からも愛され、折に触れ学生からの相談に乗っている。

浅見 怜奈さん
2017年4月人文学部日本文化学科入学。高校2年生の時、歴史の授業で文化の面白さに目覚め大学進学を決意。推薦入試で受験。学生生活では、オープンキャンパスや地域イベントなど様々なボランティアを通して積極的に受験生と関わる活動に参加。聖学院生の等身大の姿を伝えたいと、日々奮闘する姿が印象的。

二人の対談の様子は動画でも
ご覧いただけます。
右記QRコードからアクセスしてください

Asami's Timeline



一人を愛し、一人を育む。

他の誰でもない、
かけがえのない存在である
あなたと共に。

夢や希望だけでなく、
時には、その胸に抱く
悩みや不安も分かち合いながら。

4年間という限られた日々の中で、
一人ひとりのかがやく可能性を見つけ、
学びや人との出会いを通して、
その芽を豊かに伸ばしていく。

それが、キリスト教の精神に基づいた
聖学院大学の教育です。

一人を愛し、一人を育む。

すべては、人を愛し、
人に愛される人を育てるために。

Love God and Serve His People
聖学院大学
一人を愛し、一人を育む。
seigakuin.jp

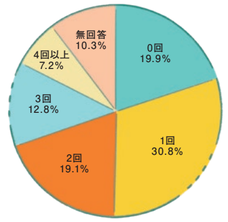
& Seig Research

データでひもとくSeig Life Vol.01

聖学院生は、どんなキャンパスライフを過ごしているのでしょうか。
なかなか見えにくいその実態を、在学生のアンケート＆コメントを通してご紹介していきます。
第一回目となる今回は、オープンキャンパス特別編。
4つのデータから聖学院生の大学選びが見えてくるかもしれませんよ。

調査期間：2017年4月
調査対象：聖学院大学2年次～4年次750人
株式会社マインドシェア調べ

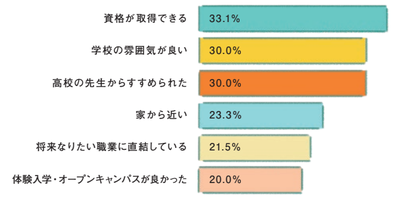
Q.1 Seigのオープンキャンパスや説明会に何回参加した？



1回参加が最多！入試の時に、初Seigという人も。

オープンキャンパスも入試説明会も参加せずに入学してきた人が意外に多く、なんと19.9%も占めています。またそれとは対照的に、4回以上参加したというツワモノも。実はSeigでは、個別での大学見学も受け付けています。普段のキャンパスを見てみたい！という方は、そちらもぜひ。何度も足を運んでみると、見えるものが違ってくるかもしれませんよ。

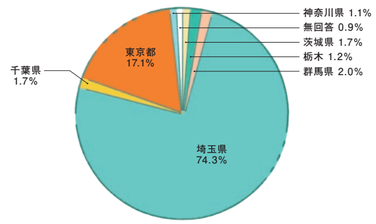
Q.2 どうしてSeigに入学を決めたの？



将来の自分に近い大学？家から近い大学？

「資格が取得できる」「将来なりたい職業に直結している」と、多くの先輩が将来の自分から逆算して大学選びをしていたようです。その一方で、堂々の3位に食い込んだのが「家から近い」という回答。4年間ほぼ毎日通うことになるキャンパスですから、“身近にある大学”ということも大切な決め手になるんですね。

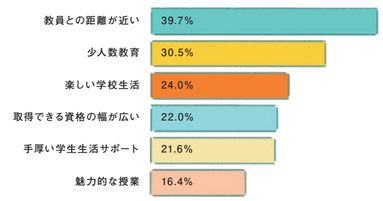
Q.3 入学後、どこに住んでる？



地元・埼玉在住が圧倒的シェア！

市区町村別で見てみると、さいたま市が最も多く153人。だいぶ離されて、川口市（29人）、川越市（28人）が続きます。シェア2位を獲得した東京都は、埼玉県に隣接している板橋区（12人）と足立区（11人）がツートップでした。76.3%が実家暮らしをしていることから「通いやすさ」は、キャンパスライフの大切なポイントかもしれませんね。

Q.4 高校の後輩にSeigの魅力を伝えるとしたら？



学生一人ひとりに目が行き届く大学。

「教員との距離が近い」が39.7%、「少人数教育」が30.5%、さらに「手厚い学生生活サポート」が21.6%。ここから読み取れるのは、教員一人ひとりが学生一人ひとりとしっかり向き合えるということ。授業で分からなかったことの質問はもちろん、プライベートなお悩みまで、いつでも気軽に相談できる環境がSeigには整っています。

聖学院生に聞きました。

Seigってどんな大学？

親より深く関わってくれる教職員がいる大学

学生の数が少ないため、さまざまな教職員の方と深くお話する機会がたくさんあります。教職員の方も私の顔を覚えてくださっていて、体調の心配をしてくれたり、一緒に喜んでくれたり、また悩んでくれたり…。1年生から関わりのある教職員の方は、もしかしたら親よりも深く関わってくれているのでは、と思うほど。就職活動で悩んでいる時は、私の性格を考えて会社を探し出してくれました。また内定をいただいた時には私や私の両親よりも喜んでくれたんですよ。

こども心理学科4年　青木 登和子

人との出会いの機会を与えてくれる大学

聖学院では自分のこと、周りのことをじっくり考える機会を多く与えてもらっている気がします。より深い“人”との関わり方ができるところが魅力かもしれませんね。例えば、1年次の「ライフデザイン」の授業。これが本当に大変で（笑）。何が大変かというと、入学して間もない頃に、たくさんの人とコミュニケーションを取らなくてはいけなかったから。でも、あの授業がきっかけで、周りに目が向き、先生や友人にも出会えました。当時は大変でしたが、今では感謝している授業の一つです。

日本文化学科2年　狼 さら

キャンパスの外からのメッセージ

学外のみなさんの目には、Seigや聖学院生は、どう映っているのでしょうか。

真面目？しっかり者？優しい？面白い？それとも……？
今回はボランティア活動を通じてSeigに関わってくださっている方々に、
Seigのこと、聖学院生のこと、その印象やエピソードを寄せていただきました。

Voice 01 内に秘めた想いを、行動に変える強さを持っている。

聖学院生といえば、ボランティア活動。私の中でそうイメージされるのは、ボランティア活動の現場で出会うことが多かったから。そして、学生の印象は、総じて「真面目」「内に秘めたものを持っている」である。特に東日本大震災の時に出会った学生たちは、強烈な記憶として残っている。
震災後、社協はボランティアバスによる復旧支援活動を開始した。過酷な活動であったが、聖学院大学から何人もの学生が参加してくれた。なかでも、3期のボランティアバスで活動を共にしたA君は印象深い。とても大人しい学生で話しかけてもあまり言葉が返ってこない。夏の照りつける太陽の下、しゃがみ込んで、黙々と瓦礫を拾う姿を見ながら、彼の目には今何が映っているのだろうか、後悔してはいないか、と気になっていた。その後、秋も深まり、ボランティアの参加者も減り始めた第5期でA君と再会を果たした時、あの夏の日、彼の目に映っていたのは、瓦礫ではなく被災した人の姿や生活だったのだということを確信した。彼はその後も大学による釜石での復興支援活動などに積極的に関わっていたそうだ。
震災は、時に被災した人だけでなく、応援しようとした人の人生も変える。自分はこのままでいいのかと気づかされ、心を揺さぶられ、突き上げる衝動に駆られて一歩を踏み出した人は多い。ボランティア活動はそれが原動力でもある。自分に悩み、殻を破れず、一歩を踏み出せないでいる人は、聖学院大学のボランティアセンターを覗いてみてほしい。やたらフレンドリーに、そして本気で寄り添ってくれるスタッフがいることを私は知っている。かけがえのない大学生活。ボランティア活動で自分探しをしてみてはいかがだろう。

社会福祉法人上尾市社会福祉協議会
山辺 素史 様

Voice 02 学生さんたちといっしょにすごした思い出はいっしょうわすれません。

わたしが、大学のみなさんと会ったのは、2012年のさくらの時でした。たしか、大学生の女の子は1人で、釜石市でさんかしていた女の子もわたし1人だけでした。その人はゆっぽ（藤川友帆）さんです。はずかしくて、あまりお話し出来なかったと思います。そのあと毎回ゆっぽは釜石に来てくれて、うれしかったです。そして、やさしいお姉さんだったのですぐに大好きになりました。次はいつ来るかととても楽しみで、プレゼントとしてクリップや小物入れ、ビーズでストラップやブレスレットなどをお姉ちゃんと作りました。これは、ほかの学生さんにもあげました。ゆっぽとこだまくんが、取材をうけていて、わたしの家のさくらの木（さくらのいしょくの1回目でもらったさくら）を見に来た事もありました。とても大きくなっていたのでビックリしていました。そのあと、ゆっぽのそつぎょう式に行った事もあります。そつぎょう後も釜石に来てくれてイオンでプリクラをとったり、ごはんを食べたり、とても楽しかったです。今の学生さんたちともたくさんあそびたいです。はずかしがりやのわたしですが、よろしくおねがいします。学生さんたちといっしょにすごした思い出はいっしょうわすれません。元気でがんばってください！

釜石市立白山小学校 4年
佐々木 結香 様

Voice 03 活動を通じて、人の話を聞く力、他者を思い発言する力が身についている。

NPO法人彩の子ネットワークは、子育て中の母親からいろいろな人に呼びかけて、自分たちに必要なものを自分たちで作るという活動をしています。母親だけではない人々との関わりの中で子どもたちが育つようにしたいと、聖学院大学の学生さんにもボランティアをとお声がけしました。毎年3月に開催している「こども夢未来フェスティバル」には、ボランティア団体「ハート&スマイル」に参加していただき、また上尾市つどいの広場「あそぼうよ」や、さいたま市子育て支援センター「みぬま」には、保育ボランティア等でお世話になっています。
ボランティアに来てみたものの、この場にどういたらいいのか戸惑い、不安そうだった学生さんが、赤ちゃんから信頼される体験をして、みるみるうちに自信に満ちた表情に変わっていく様子に何回も出会っています。「こども夢未来フェスティバル」の実行委員会では、企業や障害のある方たちの団体等、いろいろな人の発言に触れることができ、その話し合いをもとにサークルの仲間で意見を調整して、実際にどんな催しを作っていくか進めていくのは、とても力がいることだと思います。人の話を聴く力、他者を思い発言する力がついていく様子がとても頼もしいです。
同じ立場で葛藤できるサークルの仲間や、ボランティアセンターの方たちに支えられながら、大学で学び、ボランティア活動でのたくさんの人々とのやりとりを体験して、4年間で大きく成長しているのだと思います。関わっていた学生さんが、就職試験の面接でもしっかりと自分の思うことを発言して内定をもらっていると聞き嬉しくなりました。自分でやっていける力を育むことができるのが、聖学院生ではないかと思います。

ＮＰＯ法人彩の子ネットワーク共同代表
上尾市つどいの広場あそぼうよ施設長
鈴木 玲子 様

Voice 04 一緒にお話ししたり、ネイルをしたり…。今でも忘れられない思い出です。

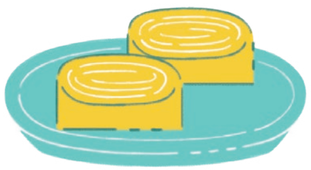
私が聖学院大学の学生さん達と初めて会ったのは、小学３年生の夏です。その頃はまだ幼なかったので、あまり覚えていませんが、緊張している私と妹に学生さんは、優しく声をかけてくれて、とてもうれしかった事を今でも覚えています。そして、私も妹も学年が上がり、私は中学１年生に、妹は、小学２年生になった時の秋、私は学生さんにネイルをするようになりました。私の誕生日に大学の金谷先生からネイルのセットをもらった事がきっかけです。そして、その冬のクリスマス会から、学生さん達にネイルをするようになりました。まだ始めたばかりで、最初の頃はあまり上手くできなかったけど、ネイルをしてもらった学生さん達は笑顔でとてもうれしそうに「ありがとう」と言ってくれて、私もとてもうれしくなりました。私が５年生の時、大学１年生だった金子朋寛（かねごん）さんに会いました。かねごんはとても優しく、釜石に来るたびに私の事を覚えてくれていて、とてもうれしかったです。それに、お話しをしながら、一緒に絵を描いたり、心理テストを読んだりしました。そして、かねごんにネイルをしました。男の人でネイルをしたのは、かねごんが初めてでした。かねごんと一緒に過した事は、今でも忘れられない思い出です。今、私は中学３年生になりました。かねごんはもう、大学を卒業し、今は老人ホームでのお仕事をしています。最近では、かねごんとメールをしています。学校の事や、部活の事など、楽しくしています。それに、今でも聖学院大学の釜石でのイベントは行っています。学生さん達が優しく声をかけてくれたり、お話をしたり、ネイルをしたのは、本当に今でも忘れられません。また、学生さんたちがくるのを楽しみにしています。大学でも元気に頑張ってください！！応援しています！！

釜石市立大平中学校 3年
佐々木 波香 様

Voice 05 この子達なら一緒に良いお祭りを作っていけると確信しました。

私が聖学院生と一緒にお仕事をしたのは、平成27年度の「あげお産業祭」の時です。このお祭りは商業・工業・農業の３つの産業が一堂に会し、それぞれ自慢の商品や料理などを提供したり披露したりするもので、毎年多くのお客さんで賑わいます。しかし、工業部門のエリアについては、集客面で課題を抱えていました。そこで私は、学生の若い力で工業エリアを盛り上げることができないかと考え、聖学院大学にご相談に行き、ボランティア団体「ハート&スマイル」を紹介していただきました。ただ正直、学生にどこまでできるのか半信半疑ではありました。
その後、打合せの場で初めてハート&スマイルの皆さんと会いました。代表の牛込君を筆頭にメンバーの皆さんがとても明るく素直で、打合せにも真剣に取り組んでくれたため、当初抱いた不安要素はすぐに無くなりました。この子達なら一緒に良いお祭りを作っていけると確信しました。そのため、少しでも学生の皆さんにとって有意義な経験にして欲しかったので、自由な発想で新しいイベントを企画実行して欲しいと要望させてもらいました。正直、楽しんでやってもらえれば失敗しても良いと思っていたのですが、彼らは一生懸命取り組み、見事に子ども向けのイベントを２つ手掛け、会場を盛り上げてくれました。当日を迎えるまでにはたくさんの失敗や苦労があったかと思います。しかし、それを乗り越えやり遂げられたことは、貴重な経験になったかと思います。この経験を今後様々な場面で活かして欲しいと思っています。
実際、その時ハート&スマイルと一緒に活動してくれた福田君が今年上尾市役所に採用されました。きっとこの時一緒に活動した経験により福田君は市役所への就職を選んでくれ、また採用側も彼の能力を認めたのだと思います。今後も聖学院大学から、上尾市の未来を担う職員が誕生してくれることを期待しています。

上尾市行政経営課
S様



Voice 06 素直でおとなしいという第一印象。でも、出会うたびにどんどん変わっていった。

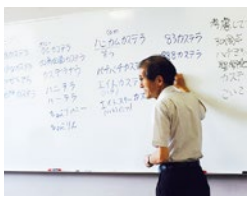
地元・釜石の高校生は、聖学院生とふれあっている時、最も自分らしさを出せていると思います。高校生も聞きたいことはあるけれど、自分から声をかけるのはハードルが高いもの。でも聖学院生は話しかけやすい、高校生たちも素のままでいられるのだと思います。ある女子生徒は、初めて聖学院生と接した時「とても話しやすかった」と言い、その後も聖学院さんが来る集まりには参加してくれています。そんな彼女を見て他の高校生も参加するようになり、少しずつ変化が生まれています。
聖学院生には、正直最初は力強さを感じていませんでした。素直なんですが、おとなしいというか。でも釜石に来る度に変わっていくんです。ボランティアチームSAVEの代表ナベちゃん（2017年３月 こども心理学科 卒業）はその典型でした。自分の想いを自分の言葉で伝えるのは力がいることだと思いますが、ある活動の報告の時ナベちゃんの言葉に力が入ったと感じた瞬間があったんです。釜石にフワフワの卵焼きを作る藤原政子さんという方がいて、ナベちゃんはこの藤原さんにも自分の想いを丁寧に伝えていました。ナベちゃんを始めとした、たくさんの方の想いが藤原さんの背中を押す力になって、フワフワの「幸せの黄色い卵焼き」は、商品としてメニューに加わり、みんなに愛されています。
こういったメディアに出ないような「誰かが一歩前向きになれた」という小さな変化が大切だと思っています。その積み重ねこそが復興につながっていくから。そう考えるとナベちゃんはボランティアを通して素晴らしい働きをしたと思います。また私自身も震災前までは大学生と関わる仕事はしていなかったんですけど、アプローチ次第で彼らの成長に貢献できることに気付けました。今の自分があるのもそういうやり取りを積み重ねてきた結果です。みんなのおかげで成長させてもらっています。

一般社団法人 三陸ひとつなぎ自然学校
代表理事
伊藤 聡 様

「聖学院大学創立30周年・グローバル・コンパクト加盟 中期ビジョン策定」記者発表会を行いました！

2018年6月19日(火)、聖学院大学において「グローバル・コンパクト署名加入、中長期ビジョン開始」と題して記者発表会を行いました。聖学院大学は今年で創立30周年を迎え、学校法人としても2023年に創立120周年を迎える節目であることから、新たな時代の課題に貢献する教育機関として中期ビジョンを策定しました。
国連の機関であるグローバル・コンパクトに加盟することで、これまでも行ってきた社会課題への教育の取り組みをSDGs(持続可能な開発目標)と照らし合わせて可視化していくことが確認されました。記者発表会では理事長による「聖学院の歴史と中長期ビジョン」、渡辺事務局長による「中長期ビジョンとSDGsの関わり」、ボランティア活動に取り組む本学学生より「活動紹介とSDGsとの位置づけ」が報告されました。

埼玉県産はちみつ100%！聖学院大発「宮原聖子のハニテラ」が完成しました！



「さいたまミツバチプロジェクト」とのコラボレーションから誕生

「ミツバチプロジェクト」は、ミツバチの飼育を通じて、自然の不思議さ、ありがたさを感じながら、地域交流や環境保全を推進するプロジェクト。全国各地で広がりを見せる中、2011年春に「NPO法人さいたまミツバチプロジェクト」が始まりました。大学と同プロジェクトは、共に地域に根差した活動を行う中で、聖学院大学30周年を記念して、埼玉県で採蜜されたはちみつを使ったお菓子作りをスタートしました。

政治経済学科「まちづくり学ゼミ」の学生たちによるネーミング

政治経済学科のまちづくり学を専攻する学生たちは、毎年ゼミの中で「さいたまミツバチプロジェクト」について学び、実際に養蜂場へ足を運び、採蜜を体験します。今年は大学創立30周年ということで「自分たちにもなにかできないか」という想いから今回製作したカステラのネーミング候補を30案ほど出しあいました。その中から選ばれたのが、HONEYのカステラ、その名も「宮原聖子のハニテラ」です。
パッケージの黄色い花はさいたま市北区の花、「菜の花」。さいたまミツバチプロジェクトの蜂たちは菜の花からはちみつを作っています。「宮原聖子のハニテラ」は、その埼玉県産100%のはちみつを使用。ふんわりおいしいカステラができ上がりました。

※宮原聖子：聖学院大学の"非公式"キャラクター。「〜なの」が口癖の永遠の大学2年生。

聖学院大学 広報誌
&Seig
発行元：聖学院大学 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1　TEL：048-780-1707
E-mail：pr@seigakuin-univ.ac.jp　Web：seigakuin.jp　発行：2018年8月